
マフィアな国、ですか？

翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マフィアな国、ですか？

【Nコード】

N7125V

【作者名】

翡翠

【あらすじ】

普通の世界で暮らしていた、葵、彩花、京次、雅人の四人。ある時、四人はパラレルワールドに飛ばされてしまった…

飛ばされたのは「ヘタリア」のキャラクター達がマフィアとして過ごしていた世界でした！四人は元の世界へ変えられるのか！？

キャラ紹介？（前書き）

翡翠です。

この話にはマフィアな国達がでてきます。

オリキャラがたくさん出てきます！（しかも捏造国家じゃないです）
嫌いな人は見ないでください！

キャラ紹介？

オリキヤラ

【ヘラⅡヴァグナー】（しげもと あおい重本 葵）

武器*拳銃（ルガーP38）

歳*14 性別*女性 一人称*うち、俺

仲良し四人組の一人。かなりのアニメ好きで、テンションが上がると奇声を発する。イレーネ（彩花）とはアニメ友でもある。アイザック（京次）、に対してはかなりの信頼を置いており、ヴィタリ（雅人）、イレーネの年上組（特にイレーネ）に対しては、忠実。ヘタリアは結構愛読書。一人称がうち、又は俺だけあって時々男っぽくしゃべる。ってか性格が男っぽく変わる。

【アイザックⅡポリヤコフ】（すきなり きょうじ杉成 京次）

武器*拳銃（トカレフTT-33）

歳*14 性別*男性 一人称*僕

仲良し四人組の一人。のほほんとした性格をしており、四人のまとめ役その一。ヘラ、イレーネのようにアニメ好きではないが、アクションゲームとかは好き。ヘラとはいろんな場面で相棒となり、行動する。ヴィタリに対してはヴィタリと毒舌対決が出来るほど毒舌。仲が悪いわけではない。イレーネは、普通に先輩として尊敬している。ヘタリアはヘラがしゃべってるのを聞いたことがあるなぐらい。

【イレーネⅡシェーンハイト】（きはり あやか木原 彩花）

武器*突撃銃（G36）

歳*15 性別*女性 一人称*私

仲良し四人組の一人。結構ハキハキと物をいい、物事をきちんと組み立てて考える。四人のまとめ役その二。ヘラのようにアニメ好

き。まとめ役である反面、ヘラ、アイザック、ヴィタリの三人をよくからかって遊ぶ。ヘラにはかなり慕われており、歳が一つ違うなりにとても仲が良い。からかうことはあってもからかわれることは少ない。ヘタリアは読んだりして、好きだけどヘラほどではない。

【ヴィタリ＝オルグレン】（静谷^{しずや} 雅人^{まこと}）

武器*長剣

歳*15 性別*男性 一人称*俺

仲良し四人組の一人。悪知恵が良く働くので、危機を脱出しやすい。からかわれるよりからかう方が好きだが、イレーネには適わない。よく揚げ足を取られてしまう。アイザックに対しては毒舌。仲が悪いわけではないし、むしろ仲はとても良い。お互い慣れているので相手から言われた毒舌に関してにはほぼへこまない。ヘタリアはイレーネにちよつと聞いたことがある。

キャラ紹介？（後書き）

次もキャラ紹介です。

とりあえず失礼します〜。

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介その2です。

最初から四人が飛ばされた世界にいた方々です。

キャラ紹介？

【ローゼ＝ベレスフォード】

武器*拳銃(ウエブリー&スコット M1909)

歳*20 性別*女性 一人称*私

アーサーのパートナーとしてR・Rや

、遮那を追

っている。アーサーのパートナーの所為なのか、ツンデレで料理がヘタ。(といっても食べれないほどではない)責任感と正義感が強く、自分なりの考えを普段からもって行動することが多い。

【藤里 杏奈】

ふじさと あんな

武器*拳銃(9?拳銃)

歳*20 性別*女性 一人称*私

菊と耀に拾われて以来、二人に拾われた他の三人とともに成長。

成長してからは、「遮那」の一員として五人と一緒に戦う。真面目な性格をしており、勇洙が起こす行動によく突っ込みを入れる。梅(台湾)とは気が合い、一緒に買い物に行ったりする。

【シルヴェストロ＝カーティス】

武器*短刀

歳*26 性別*男性 一人称*俺

ちよつと弱気になる時がある、ロヴィーノのボディガード。普段は普通。ヘラとは気が合うところがあるらしく、仲良く喧嘩する。ソテイリオの双子の弟で、そっくりだが、色々と正反対。右頬に十字の切り傷がある。

【ソテイリオ＝カーティス】

武器*短刀

歳*26 性別*男性 一人称*俺

シルヴェストロの双子の兄で、結構強気な性格。フェリシアーノのボディガード。よくシルヴェストロやフェリシアーノ、ロヴィーノ、ルートヴィッヒのことをからかって遊ぶので、ヘラやギルと

よく協力して人で遊ぶ。

キャラ紹介？（後書き）

これで捏造キャラは終了…だと思います。

今回は組織名について書きます。

ちなみに、台湾は梅、香港は涛で行きます。

組織名紹介（前書き）

組織名紹介です。一話分ぐらいあります（汗

組織名紹介

【R・R】
アイル・アイル

正式名称 Rosso・Rot。四人が飛ばされた世界で活動しているマフィアその一。ヘタリアの国達で言えば、ヨーロッパのメンバー（例外あり）が主。ボスはフェリシアーノ・ヴァルガスとロヴィーノ・ヴァルガスの二人。ボスが平和主義のため、R・R自ら他の組織を挑発することはないし、一般人にも手を出さない。薬とかも売らない。マフィアと呼べる存在なのか怪しいが、一応マフィアとして活動する。

【遮那】
あしな

マフィアその二。ヘタリアの国達で言えばアジアのメンバーが主。ボスは王耀。必要とあらば他組織を挑発するが、やはり一般人には手を出さない。駆け引きが得意で、自分達を守るために、気に入った組織とは同盟を組んだりする。幹部がボスの家族（養子・義兄弟）で主に構成されているというちょっと特殊な組織で、永い間続いている。

【マフイー】
マフイー

マフィアその三。旧ソビエト連邦が主。名前の通り、自分達の目標のためならなんでもする。他の組織とは関わろうとしない。邪魔であれば誰でも消す。、という名前は、実は「欲望」の他に「願い事」を意味する。ボスはイヴァン・ブラギンスキ。上記二つの組織と違い、「完全なる悪の組織」として恐れられている。しかし、本当の目的は…

【HOJ】

正式名称 Hero of Justice。個人的な探偵事務所。

北米三人が経営している。誰が上司で、というのは無いがはじめたのはアルフレッド＝F＝ジョーンズの為、形式上アルフレッドを社長、としている。現実的な探偵事務所とする事（浮気調査などw）をせず、小説に出てきそうな探偵の仕事のみを受け付けるので、あまり儲けることはできていない。

【Secret Police】

マフィア達をとりしめるための警察。中立兄妹、ヨーロッパ（例外）等が主に居る。上司は他に居て、国達は刑事。国達は自分達の国を守るために行動するが、上司から理不尽な命令が下ることも。それでもしぶしぶ納得して命令を遂行する。アルフレッド達はもともここに所属していたが、上司の理不尽な命令に対し反発。警察を抜けた。

【Tamircilik】

依頼とあればなんでもする万事屋。地中海三人で経営している。今はR・Rや遮那、HOJの協力で稼いでいる。リーダー的存在はサディク＝アドナン。依頼をしに行った時高確率でリーダーとメンバーの片方が喧嘩しているため、おとなしいもう一人のメンバーに依頼内容を伝えることが多い。しかし、依頼遂行時は息ぴったり素早く、的確にこなしてくれる。

組織名紹介（後書き）

まとめてる最中でごっちゃになりました…

分かりにくいかもしれません

なんとなく本文の方で分かってください（え

メンバーは本文中で早めに出していただくので…

だいたいどこに誰がいるかわかると思いますが…

後、北欧、アジア（日本、中国周辺以外）はでて来ないとおもいます。

プロローグ(前書き)

ようやく本編突入です(汗)

プロローグ

何故俺達なんだろうか。

どうして俺と　　は向かい合って互いに銃を向けているのだろう。
きつと、また会うときは分かり合えるよね。

だから、　　も、　　も生き永らえろ。

俺と彩花先輩は、この賑やかな「マフィア」に居るから。

葵 side

…えーと、ここはどこだっけ？

「おい葵。あ、なんかおーいお茶みたいになった。」

「あ、彩花先輩っ!？」

「いやー、いきなり非日常に飛ばされたら驚き通り越して楽しいね。」

「

へ?」

きよろきよろとあたりを見回す。あ、部屋の造りがヨーロッパみたい。

「あのさーここ、ヘタリアのキャラが出てくるから。驚かないでね?」

「え。どういう、ことですか」

「いやー、私達中学校に居たじゃん?で、四人一緒に倉庫入ったじゃない?」

そういえばそこで、古くさい本をみつけたような。んで、
そこでヘタリアのキャラのマフィアってかっこよさそうって話したような。

その直後、本が急に光りだして。それから記憶、は無い。

「まさか…!」

「そのまさかつばいよ。」

本が光りだした直前にしたのはその話。願い、というか…

「私達がしてた話の中で一番願いつばい話を実現してくれたみたいだね。」

「…マジですか…って、京次と雅人先輩は!？」

「一緒に飛ばされたのかも知れないけど…目を覚ました時一緒には居なかった。」

「そんな…。」

早く見つけて帰らないと…現実の「ヘタリア」に影響があるかもしれない。

あれ、二次創作つばい世界に行ってるんだったら別にいいのかな。とにかく。…話は後だね。」

カツ、カツ、と誰かが歩いてきたようだ。

俺達はこれからどうなるのだろうか。ってか

京次と雅人先輩を見つけて早く帰らないと…!

プロローグ（後書き）

本編突入しましたが

ヘタリアキャラ登場は次回からです。

話の切り方が…すみません、がんばります…。

いちわ。(前書き)

へタリアキャラやっど(?)登場です!

いちわ。

「目を覚ましたか。」

低い、通った声。どっかで聞いたことあるような…

ヘタリアキャラで、この声と言えば…

「二人とも目を覚ました所で聞くが、何故こんな所に女子供が二人で居たんだ？」

「ルートヴィツヒだあ〜！」

思わず叫ぶ。しかもフルネームで。つて、あ。

「何故俺の名前を知っている！？まさか…敵の！」

「あー違います。それはおいおい説明しますから。」

彩花先輩、どーしてそんなに落ち着いてるんですか。

ヘタリアのルートさんじゃないすか。皆大好き(?) ルートさんですよ。

「少なくともうちは大好きです！」

「…その連れは急にどうしたんだ。」

「…無視してあげて下さい。私達は、信じられないかもしれませんが…他の世界からやってきました。」

「他の世界、だと…？」

「まあ、信じられなくても普通だと思えます。」

そういうと彩花先輩は立ち上がる。

「迷惑だとは思っているので、ここを立ち去って帰る方法を見つけないか思っていますか。」

「しかしだな…俺達としても怪しい奴をそのまま帰すわけにはいかんだ。」

やっぱりマフィア、なのかな〜、服装もスーツだし。

そうこうしていると、もう一つの足音が近づいてきた。

「おいヴェストー？目え覚ましたか？」

「あ、ああ兄さん。だが少し問題が発生してな。」

…ドアから登場したのは…お分かりであろう、ギルベルト。

「くぁwせdrftgyふじこlp」

「あ、葵が壊れた。」

のんびり実況しないでください。ルートはギルにその間にいままでの話をしたらしい。

「面白えじゃねえか！こいつら、ここに置こつぜー！」

「な、に、兄さんっ!？」

「どーせお前ら行く所無いんだろ。外で困らせるのも悪いしな。」

「…ところで。あなた達は何を？」

なんとなく、というか推測で分かったことだけど、聞いてみた。

「R・Rって言うマフィアだけど？」

やっぱり。ですよ〜 誰が居るんだろ。

「驚きナシか。…お前ら、「俺達」の事は知ってるんだろ？」

「え…はい。」

「それなら最初はそれを教える。その後の話は後でしようぜ。」

流星軍事国家なのか、うち達の反応でさらに事情を推測したギル。

…普憫なんていってサーセン。

「まずは、私達の知ってることから。あなたは、『ルートヴィッヒ』

。そっちは『ギルベルト』『バイルシュミット』、ですね。」

「正解。俺達の事、そっちではどういう風になってるんだ？」

「『ヘタリア』って言う漫画に出てて、ルートはドイツ、ギルはプ

ロイセンって国の化身ってことになってます。」

「ふむ。…国の化身か。」

そう言うって腕を組むルート。敬称なんてもう付けられません。

「敬称は善処します」

「…」

調子に乗りすぎました。冷たい目線…

「ま、この子はほつといて。次です。」

「今度はこちらだな。」

「俺達はマフィアだ。それが事実だからな、悪い事はしてません、

なんて弁解するつもりはねえ。だけど、仲間は守る。そんな組織がこのR・Rだ。」

ギルはそう言うと、不意に表情を硬くする。

「これから先に踏み込んだら…少なくともこの世界ではまともに生きていけない。それでもいいんだな？」

うちと先輩、二人でうなづく。少なくとも、この人達についていかなければ、

帰ることの出来るきっかけはつかめないと思う。

それに、情報通のマフィアだから、京次と雅人先輩を見つけるのも早いと思う。

「なら、話すぞ。これがこの国の今の状態だ。」

ギルは、ゆっくりと息を吸った。

いちわ。(後書き)

ヘタリアキャラが出てきてくれました…
しかし主人公ではなく芋兄弟…
作者はルートヴィツヒが大好きです。

にわ。(前書き)

ほぼヘタリアキャラは芋兄弟しか登場してません。

にわ。

「この国にはいま三つのマフィアが存在している。」

「それが俺達『R・R』と、『遮那』と『』だな。」

まあ、行動がまったく違いけどな。」

ギルは目を細めている。何故かは分からないが、怒っているようだ。

「兄さん、この二人には説明しないと分からないだろう。」

「…ああ、そうだな。さつきも言ったが、悪いことはしてません、なんて言い訳するつもりはねえ。けどな、」
『のやり方は気に入らねえんだ。』

「…そのボスの名前とか分かります？」

「ああ。分かるぜ。『イヴァン・ブラギンスキ』って言う。…あと、敬語はもうやめろ。」

「いや、ごめんなさい。なれないんで…。」

ボスの名前、イヴァン。国名は、ロシア。

「あいつらは一般人にも手を出す。俺達と『遮那』は一般人に手を出さないってのが暗黙のルールになってんだが…。」

「遠い国ではそれがマフィアと聞くのだが…、どうもそうはなれなくてな。」

「ただ、ロシアってそんなに悪い国だと私は思っていない。」

純粹故の黒さ。それがロシアで、だけど、

私が知っているロシアは、皆と友達になりたかったはず。そんなに悪い人になってるとは思いがたい。

「まあ、それが俺達の国のマフィアだな、後は…。」

「『HOJ』、『Secret Police』、『Tamir cilik』だ。まあ、それぞれ一言で表すと、『探偵』、『警察』

、『万事屋』だ。『HOJ』と『Tamircilik』は時々協力してくれるのだが…。」

「『Secret Police』はマフィア専門の警察だな。アイサーって奴とバツシュって奴が半端無くしつけーんだよ。」
そう言うとギルは溜め息を吐いた。

…そんなに怖いんだ。

「とりあえずそんな感じだな。ここまで、とか言ってももっと詳しく説明はできるのだが…、後戻りは出来ないぞ?」

「大丈夫です。ねえ、葵?」

「ええ。俺は大丈夫です。」

「二人ともなかなか根性あんじゃねーか! よっし、じゃあフェリちゃん達のところ行こーぜ!」

ああ、ここにはフェリ居るんだ…ってことはロヴィ達も居るかな…、

「ところで、このボスって誰なんですか?」

同じ疑問を思い浮かべたようだ。

「このボスカ、それならフェリちゃんとお兄様だけ?」

「(某馬鹿騒ぎの…ジャジー的な!)」

うん、きつと今二人とも一緒の事考えてた。

まあいいや。折角ヘタリアの皆を見れるんだ。

「こつちだけ、二人とも!」

「そう言えば、名前をちゃんと聞いていなかったな。二人とも、名前は何?」

「私は木原彩花です。」

「うちは重本葵!」

うん、敬語は無理です。今現在彩花先輩だけです。使う人は。

「…『遮那』の構成員達と同じような名前なのだな。『R・R』では少し不便だから…偽名、いるか?」

「おっ、おもしろそうだな! じゃあ俺達から一人ずつ偽名つけてやんよ!」

「…兄さんに二人とも任せるつもりだったのだが。」

「つれねえ事言うなって! んじゃ。俺は彩花な! 『イレーネ・シユ

「インハイト」これどーよ！」

「なら、俺は葵か。…『ヘラ・ヴァグナー』でどうだ？」

意外な提案により、この世界での名前をつけてもらった。

なんか嬉しい。

「ありがとうございます。」

「いいっていいって。んじゃ、丁度部屋見えてきたから入ろうぜ！」

扉に向かって指を指したギルは、多少乱暴にドアをノックした。

「入っていーよー」

中から、のんびりした声。確かにそれは、うちの世界で言う、

『ヘタリア』の主人公、イタリア・ヴェネチアーノこと、『フェ

リシアーノ・ヴァルガス』

にわ。(後書き)

途中の某馬鹿騒ぎ、元ネタは分かっただでしょうか？
次からヘタリアキャラをどんどん出して行きたいですね…！

さんね。(前書き)

ぶ、文章がごちやごちやに…
次から立て直しますっ(汗)

さんね。

「失礼するぜー！」

部屋の中には、さつき返事をした、フェリシアーノ、そしてもう一人のボスロヴィーノ、アントーニョ、ローデリヒ、エリザベータの五人が居た。

あと、そっくりな双子っぽい人が二人。「ヘタリア」の登場人物じゃないと思うんだけど。

「ようこそ。この部屋に来たって事はこっちの…「裏」の世界に入る決意が出来たって事だよ、お二人さん？」

「ええ。」

「うん。」

大きくうなずくうちと先輩。

「なら歓迎するよ、『ヘラ』、『イレーネ』。…葵と彩花、って呼んだほうがいいかな？」

「もしかして…あの部屋には監視カメラとか…あつたんですか？」

「もちろん！」

さっきの会話は全て聞かれていたようだ。と言うことは、もう説明は無しでいいと。

「で、聞きたいことがあるんだけどね？」

「なんですか？」

「一緒に居たのは四人、って言ってたよね？あともう二人は？」

「分かりません。一緒にこっちへ来てるのかも、全部です。」

「じゃあ俺達も探すの手伝うから！あと、ギルベルトも言ってたけど、本当に敬語は無しでいいよ、ってかこれ命令！君達も今日からここの一員だし！」

フェリはそう言つと、にこつ、と笑った。

十数歳の私達をこのマフィアに入れる、という方向に話が向かっているのは、あの本の能力かな。

「自己紹介、とかは君達は知ってるから良いよね。ところで君達今何歳？」

「私は15歳です。」

「うちは14歳です。」

それを聞くと、フェリは少し考え込む表情になって、

「うーん…、俺ちょっと考えたいことがあるから、ルート、ギルベルト。二人を案内してきて〜」

と言った。

「ああ、分かった。」

「んじゃ行くか。へら、イレエネ、こつちだ。」

二人に続いて部屋を出て、少し薄暗い廊下を歩く。

さつき、フェリしか喋ってなかったけど…、やっぱり少し皆違うのかな。

つてか、フェリちゃんが考えたいことって何だろう。

「おい、へら、」

「ぶツ!？」

ルートの呼ぶ声が聞こえたかと思うと、盛大に柱に顔をぶつけた。

「おい、大丈夫か？」

「あゝだ、大丈夫…。」

目の前がチカチカして、本当はあんまり大丈夫じゃない。

まあ、それもすぐに収まるだろうから。「大丈夫」と答えた。

「なら良いが。ぶつけたのが頭だからな。具合が悪ければすぐ言うんだぞ？」

「はい」

さつきのような痛い思いをするのはもうこりこりなので、考え事をするのをやめた。

そこから少し歩いてみると、隣り合う二部屋の前に着いた。

「ここを一部屋づつ使えばいい。」

「え?」

「俺達、ここの幹部は大体ここに住み込んでいる。どうせ住む所も

ないだろう?」

正直、あの本(?)の効力がここまでとは思ってなかった。本当にうち等はこの「マフィア」の世界に足を踏み入れなければならぬらしい。

…ヘタリアキャラがいるから、帰りたいたい気持ちもあるけど、歓迎の気持ちも強い。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうか。ねえ、葵。」

「そうですね。先輩。」

「ここは少し狭いが、我慢してくれ。あと、困ったことがあればすぐに俺達に言ってくれればいい。」

「分かりました。」

「それでは、また呼びに来る。それまでゆっくりしていてくれ。」

「はい」

…返事したのは良いけど、なんか忘れてるような。

「一人楽しすぎるぜ」

「に、兄さんっ!?!」

あゝ、ギルのこと、すっかり忘れてた。

「あんまり二人を困らせるな!ほら、行くぞ!」

「待てよ、ヴェスト!…ヘラ、イレエネ、後でなっ!」

歩いてもとの道に戻る二人の背を見て、うち等はこの世界でやっと心から笑えたような、そんな気がした。

よんわ。(前書き)

すこしシリアス(?)有りです。
やっと皆が喋ってくれた…!

よんわ。

「へら、今良いか？」

「はい」

ドアがノックされ掛けられた声。ルートのものだ。

「フェリシアーノが呼んでいる。イレエネは兄さんと先に行っているからな。」

ほんの数分前に歩いた廊下を、今度は二人で通る。

足音しかしない静かな道は、少し気まづかった。

「…へら、お前はセートルクス・ヴァルガスの事を知っているか？」

「（ヴァルガス…フェリとロヴィの…関係者？）いや、わかんない。」

「フェリシアーノの祖父だ。…そして、このR・Rの初代ボスだ。」

フェリシアーノの、そしてロヴィーノの祖父なら、知っている。それは、きつと。

ローマ帝国。ならば、その隣には。

「いつも隣には俺の父が居た。俺は、何度もあの人と父に助けられてな。アントーニヨ達はあの二人に拾われているんだ。」

「前言撤回。セートルクス・ヴァルガスをうちは知ってる。そして、ルートの父も。」

もし、この世界もうち等の世界と似ているなら。

「二人は、消えてしまった？」

「ああ。ある日、突然な。何も言わず、消えてしまった。」

やはり。だけど、この世界がうちの願望で出来ているなら。

「きつと、いつか戻ってくるよ。若かったでしょ、二人とも。」

「ああ。歳相応には見えなかったし、元気だったな。」

そうこう話しているうちに、ボスの部屋の扉の前へとついた。

「入るぞ、フェリシアーノ。」

「うん、いーよ。」

ガチャ、と扉を開き、フェリとロヴィの前、先輩の横へと進む。
「ごめんね、ずっと考えたんだけど…。ヘラ、イレエネ。俺達と仕事してくれないかな？」

「…え、」
フェリが言った「仕事」。内容はどんなものなのかはすぐに想定できた。

あの古びた本は、うち等に戦え、と言っている。この世界で。

「私達は、未成年ですよ？」

「だけど、俺達には必要なんだ。」

「無理にとは言えねえがな。お前達が嫌ならいい。」

ロヴィがフェリの後を続けて喋る。

「なら私達はやめ、「先輩。」「…葵？」

「仕事、やりましょう。」

「葵！？でも私達は何も出来ないし、なにより危険、」

「ここで行動しなければ…帰れません。なんか、直感ですけど、分かるんです。それに、あの二人も見つけやすい。危険なものにも変わりありません。ここに来てしまった時から、ずっとうち等は危険です。」

そう、私達がここで暮らしているだけでも。

「弱い者は狙われる。何もしていなければ弱いまま。…ですよね、ボス。」

「うん。残念だけど、そうだね。」

「ああ。そうだな。」

ボス二人が頷く。

「確かに…：そうかも知れない。ここで生きていくんだから覚悟は決めるって事かもね。…私も、その仕事、受けるよ。」

「ありがとう。本当はありがとうもいえない立場だと思っただけだね、今の俺。」

「まあ、ありがとうな。…おい、お前ら別に話しかけても良いんだぞ？」

「いや〜だつて話しかけたら空気読まん奴みたいやん?」

「あなたは普段から空気を読めていませんよ、この御馬鹿さん!」

「まあまあ、ローデリヒさん、落ち着いてください。二人が驚いてますから。」

わいわい、がやがや。一気に部屋が騒がしくなった。

「ヘタリア」の世界と違うんじゃないかと、単に喋ってなかっただけか。良かった。

「皆面白いでしょ。ところで、早速一つ仕事を頼みたいんだけど…」

よんわ。(後書き)

というわけで、ローマ帝国人名は「セートルクス・ヴァルガス」です。

はいそこ、ネーミングセンス悪いとか言わない！

こまかい設定は、後々決めていこうと思います。

あと、一人オリキャラ増えるかもしれませんが(これ以上!?)

取りあえず次回は、他陣営の方が何人か出ます。

しむ。(前書き)

他陣営、やっと登場です！

「わ。」

「へら、逃げるぞっ！」

「了解！」

「待つのであるー！」

うちとルートは「仕事」の最中。後からSecret Policeと言われる、警察の一員…

というか、バツシュが追ってくる。

ルートの後について走り、二人で逃げる。

「（…なんでこんなことに…）」

始まりは、昨日の「仕事手伝う」発言以降。

「早速なんだけどさ、へら、ルートと一緒にしてもらいたい事があるんだ。」

「本当に早速ですね…。」

「今日決まったんだよ、ちょうどいい仕事のはずだし、やってもらえない？」

内容は、銃をR・Rのメンバーから受け取り、ここまで持って帰ってくる、というもの。

今日決まった、と言うのもあり、危険は少ないらしい。

…少ないらしい。

「本当は危険無いよね、うん、相手がバツシュじゃ無ければ…！」

「ヴェスト、へら、乗れ！」

逃げていく先には、ギルが乗った黒い車。

運転席からギルが叫んでいる。

「逃がさないのであるー！」

セッダーン！バツシュ独特の銃声。

今撃ちましたよねw容赦ナシですか。

「あいにくと…、捕まっている時間も趣味も無いのでな！」
「うおわ!？」

ルートに手をぐんつ、と引かれ、車に乗り込む。
ドアを閉めた瞬間、ギルが車を発進、バツシユはすぐに見えなくなつた。

「Danke、兄さん。」

「ああ、大丈夫だったか？」

「なんとか。それにしてもSecret police、動くの早くない？」

「そのことなんだが。さっきフェリちゃんに連絡したら、H O J に行けつて。」

H O J? 何の組織だろう。

「今から直行するからな。」

そこは、よくある探偵事務所のようなところだった。

「Hallo、フェリシアーノから聞いているよ。ルイス、ギルベルト。…で、君は？」

出てきたのはアルフレッドだった。

と言うことは、マシューも一緒かな？

「こいつは、ヘラウアグナー。新しいうちの仲間だ。」

「ふうん…そうかい、奇遇だね。丁度俺の所にも新しい子が来たんだぞ。」

アルは、そう言うと少し困つた顔をした。

「それにしても複雑だなあ。R・Rは悪じゃないけどさ。」

「マフィアはマフィアだから仲間が増えるのは、だろ?ま、気にすんなつて。」

「ま、それもそうだね。」

「アル?そろそろ依頼を…」

奥から現れたのは、予想していた通りマシューだった。
新しい子つてだれだろう。

うち等は事務所の中へと入ると、椅子にこしかけた。

「それで、今日は何の用事だい？」

「Secret policeのことなんだが…。」

「…あそこがどうかしたのかい？」

「突然決まった仕事があったから、今日そこへ行ったんだが、待ち伏せされていてな。」

ルートとアルが話し始める。話は聞いているが、少し暇だ。

「これ、どうぞ。」

マシューが、コーヒーを注いで持ってきてくれた。

「コーヒーは苦手だが、折角なので飲むことにした。」

「銃は受け取れなかったし、何か知らないか？」

「確実に密告されてるけど…、ここら辺には邪魔をする奴なんて居ないだろう？」

「ああ。それだから余計分からないんだ。」

確かに、アルが味方しているぐらいだ。ギルも言ってたし、悪いことは何もしていないはずだ。

まあ、一般人を殺したり、怪我を負わせない、と言う点でだが。

「何か情報が入ったり、分かったりしたことがあったら教えてほしい。」

「分かった。調べてみるよ。」

話がつき、帰ろう、とルートが言い、うち等は立ち上がった。

その瞬間、

「ただいま」

聞き覚えのある、声が出た。

11わ。(後書き)

バツシュ、アル、マシユーが出てきました。
次は他のキャラも出していきます。

ろくわ。(前書き)

二人の中の一人。登場です！

ろくわ。

「ただいまー」

その声は、

「ああ、客居たのか。お、ルートヴィツヒにギルベルトじゃねえか。後…誰だ？」

確かに聞き覚えあるけど、キューバさんの事じゃない。

「ああ、ヴェーバーか。こいつは…ヘラ？」

「なんで…お前、」

「それは…こっちのセリフですよ…雅人先輩…っ！」

四人の内の一人、雅人先輩だった。

「まさか…ヘラ、例の二人の内の一人か？」

「そう…。」

「何でお前へラって言われてんだ？…ああ、そういうことか。」

「ヴィタリ、君…知り合いなのかい？」

アルは先輩の事を「ヴィタリ」と呼んだ。と言うことは、先輩も

偽名を貰っているのか。

ヴィタリ…アメリカ名かな？

「ああ、ごめん。説明してなかったな。アル、こいつは、俺の後輩だ。」

「どういうことだい？君は…一人で居ただろう？」

「…本当の事を話す。ああ、葵、そっちの皆は聞いているのか？」

「はい。」

「ごめん、ルイス、ギルベルト。今日は帰ってくれるか？」

「ああ。」

ルートが頷いた。それを合図にうちとギルも立ち上がり、事務所を出た。

「…帰りますか。」

「ああ。後でもう一度連絡を取ればいいだろう。」

「…アルは嘘、とかあんまり好きじゃねえからな…」

アルフレッド、ヘタリアでは「英雄」^{ヒーロー}にこだわっていた。

国と言う立場でも、今の立場でも嘘は嫌いなのだろう。英雄だから。^{5。}

だから、人一倍嘘を吐くのが嫌いで、（冗談ならまだしも）

人一倍嘘に敏感なのではないか？

「喧嘩しないといいけど…」

とりあえず、雅人先輩の事を報告しようと、うち等はR・Rへと帰った。

「…ヴィタリ、君は俺に嘘をついていたのかい？」

「…ああ。」

「信頼してくれてると思ったのに、隠してたのか!？」

「アル、ヴィタリも事情があるんだよ…、」

「俺の事を知ってるなら…嘘をつくのも、吐かれるのも嫌いって…知ってるだろ!？」

信じてもらえないと思ったから、黙ってた。

それは俺の責められるべき失態。

三人は確かに、見ず知らずの俺を信頼してくれていたのに。

「ごめん。」

「出て行ってくれ。」

「アル…!?!」

「アルフレッド、おめえ…いくら何でも！」

覚悟はしていた。アルフレッドは、信頼していいはずだったのに。

「いいぜ。すまなかった。」

それだけ言って、俺の部屋となるはずだった場所を訪れ、荷物をまとめた。

そこは、アルフレッドとの相部屋。

「…一回でも、仕事してみたかったな、面白そうだったし。」

たった一日だけど、確かに楽しかった。

元氣一杯なアルフレッド。

優しいマシユー。

兄貴肌のヴェーバー。

「ごめん、嘘なんか吐いて。」

聞こえる事は無いだろう言葉を吐いて、俺は荷物を背負った。

元の世界に戻りたいはずなのに、皆と一緒にときは、その気持ち

が薄れ掛けていた。

「本当は…やべえんだろうな…」

この世界にいること自体。

だけど、確かにここに存在できた事が、嬉しかった。

ろくわ。(後書き)

と言うわけでキューさんの人名はヴェーバーです！
ネーミングセンス？何それ美味しいの？

というか他に言うべき事があると思う。私には。

雅人…この世界に馴染むの早すぎだろw

あ、いや、雅人だけじゃないけど…。

ななわ。(前書き)

口調が分からないキャラが何人かいます…ね。

ななわ。

「あ、やべ…懐かしむもんじゃねえな…一日なのに…」

あれから二十分ほどが経ち、ようやく準備が出来た。

「でもこれからどこ行こうかな」

三人へ手紙も書いたし、後はコレを俺の机に置いてここを出よう。

「…たった…一日のはずなのに…なんでこんなに嫌なんだろうな、ここを出るの。」

アルフレッドも、マシューも、ヴェーバーも本で見たことあるとは言え、話したことも無かったのに。

まあ、漫画の世界の住人だから当たり前のことなのだが。

飛ばされてきた俺を、当然のように受け入れてくれた三人。

「俺らしくねえな…よし、行くか。」

手紙を置いて、部屋を出ようとする。瞬間、

バンツ…と音がし、ドアが壊れそうなほど勢いよく開いた。

「ヴィタリっ…いるかい!？」

「アル…?」

ドアを開いた人は、アル。これから出る部屋の、持ち主。

「ああ…遅くなつてすまん。今から出るよ。」

「待つてくれ！こつちも頭に血が上りすぎて酷いことを…」

「救ってくれたあんた達を信じない、なんて酷いことをしたのは俺の方が先だろ？」

「だけど君は謝つてたじゃないか！俺はそれも無視してた…」

必死に、アルは叫ぶ。

「ごめん、ヴィタリ！ここに居てくれ！」

「…でも、俺は」

「いいんじゃないかねえか？」

「いいと思いますよ。」

ドアの影からマシユーとヴェーバーが現れた。

「アルフレッドがここまで言ってるんだ。素直になるって言つのも手だと思つぜ。」

「それに、僕達は貴方にここに居てほしいんです。」

「…ありがとう、ヴェーバー、マシユー。」

「「あ、アル（アルフレッド）がありがとう（だど）…！」」

「な、なんだい！？失礼な！」

そんな光景を見て、俺は笑った。

「君も笑わないでよ！」

「悪い…っ、くくっ…」

少し笑いをこらえながら、アルを見る。

アルは、少し拗ねながら、俺を見返してきた。

すっ、と息を吸って。

「『君がよければ、俺達と一緒に探偵やらないかい？』」

それは、昨日のアルが俺に言った言葉。

「『ああ、いいぜ』」

それは、昨日の俺がアルに言った言葉。

だけど、意味も、心境も全然違う。

今度は、互いが互いを信頼して。

「良かったですね、ヴェーバーさん。」

「まったく…世話のかかる奴らだぜ。」

嬉しそうに笑うマシューと、呆れたように笑うヴェーバー。

二人共、ありがとう。

「よし、そうと決まったら、仕事だ!」

「アル、その前にルイスに連絡取らないと。」

「ああ、そうだったね。じゃ、俺は連絡してくるから。」

そう言つと、アルは廊下へ出て行った。

「ヴィタリ、これからもよろしくね。」

「一緒にがんばろうぜ!」

二人は、俺にそう言つて、手招きをした。

行く場所は、探偵事務所に使っている部屋。

二人の後を、俺は言葉に表しにくい嬉しさを心に持つてついでに
つた。

ななわ。(後書き)

キューさんの口調が分からない…！
間違ってたらごめんなさい。

それにしても…仲直り早い！そしてなんか繰り返し！
…すみません。

はちわ。(前書き)

ローテーション方式崩してこっちから更新。
…ネタがこっちの方があつたんです！

はちわ。

「おいヘラーお前も飲めー。」

「いやいやいや無理だつてルート！うち未成年。」

だめだこりゃ。ルート完璧に酔ってる。

それにうちは色々やばいって…アルコールは！

「みせーねん？そんなのいいから　くらえっ」

普段ではルートが絶対「もったいない！」と叫んで嘆くだるう行為

ルートはばしゃん、っとビールをうちにかけてきた。

ヘタリア知識、ドイツでビールがかかるのは日常茶飯事。

やばい…っ！

そもそもこんな危機に陥っているのは、一時間前のことだ。

「ヘラ、イレネ。アルフレッドから連絡が来た。ヴィタリ…あー
雅人？はあつちで生活するそうだ。」

「分かりました。」

「今度からかいに遊びに行こ。」

なんか先輩の目が輝いている。

雅人先輩、ご愁傷様。

まあ、とりあえず先輩は安心だな。

後は、京次…。

「ああ、そういえばフェリシアーノ達が呼んでいたな。二人共、行くぞ。」

フェリの所へなんだろう…と思いつち等は歩いた。

「ああ、よく来たね。二人共。」

「今日お前らの歓迎パーティー開くから腹減らしとけよコノヤロー。」

「あー兄ちゃん、先に言っちゃわないでよー。」

「お前が遅いから悪い。と言うわけだ。楽しみにしとけよ。」

そうして、パーティーは開かれた。

で、最初の状況になる。

うちの抵抗(?)むなしく、ビールはうちに思いつきりかかった。

あー…意識無くなるよー。

自慢じゃないが、うちは…ノンアルコールビールでも…酔っ…人だから…。

「このやろーやったなああー！」

え、葵！？この声…？

私がそつちを見ると、何故か葵とルートヴィツヒがビールの掛け合いをしていた。

「ちょ…ギルベルトっ、あれ何！？」

年上の人を呼び捨てにするのはなれないが、ボスの命令だから仕方ない。

「あ？ヴェスト…かなり飲んでるな。めずらしい…自分の暴走気にしてめつたにあそこまでは飲まないのに…あーヘラちゃんまで巻き込んで。後で二人共説教だな。」

「なにのんびりしてるの！？止めないと！」

「あー無理だ。あーなったら誰にもとめらんねえ。非難しといた方がいいぜ？」

「…え？」

ギルベルトはずっとルートヴィッヒを見ているはず。嘘はついてないと思うが…

逃げた方が良いって？

「イレーネちゃん、ルートは酔うとすっごく暴走するから…」

「まあ、止めようとしないう限り俺らに害はあんまりないけどな。怖えんだよマツチヨじやがいも。」

「あのお馬鹿さん…！まあ、ヘラは酔っ払ってますから大丈夫だと思いますけど。」

「まあ…そういうところが可愛いんだけどね。」

「まあ、あんまり酷いようやったらトマトぶつけたるな！」

こんなに言われるルートヴィッヒの酒癖ってどんなのなんだろう。

「危なかったら俺達男に任せて逃げればいいから！」

「…兄貴の言うとおりにした方がいい。」

「えーと、ソティリオに、シルヴェストロ？」

「そうだよ、イレーネちゃん」

「そう。覚えてくれ。」

そういわれた双子は、大きく違う反応を返してきた。

双子なのに性格はここまで違うんだな！。

感心しながら、私は、ルートヴィヒと葵の様子を眺めていた。

はちわ。(後書き)

やっとソテイリオ&シルヴェエストロ登場。

次はこの狂乱宴の続きです。

ルート&ヘラの酔っ払い組みを主に。

きゅうわ。(前書き)

歓迎パーティー続編です。
全てイレーネ(彩花)視点。

きゅわ。

「るーとおー！びーる！」

「ここにゑるぞー！」

中学生（それも小学生に見える）と20になる青年が酔って肩組んでご機嫌だ。

相当怖いんだけど。

「イレーネちゃん、ルートとヘラちゃんばかり見てないでこっちで俺と話そ」

なんかナンパらしきものしてくる人は居るし。

ソテイリオも酒飲んで酔ってるな、これは。

「ソテイ！イレーネ、困ってるから。」

「シルヴェ、お前俺のナンパの邪魔すんのかー？」

「イレーネの前で『ナンパ』って言ったら意味無い。」

まあ…分かってたけど、そう思う。

とりあえず、双子弟のシルヴェストロが双子兄のソテイリオを叱っている間に、

超酔っ払い組みの二人を見ておく。

「あ、何か歌いだした。」

「ヴェストが歌いだしちまった…！」

「これは…止めないとヘラが危険ですね。止めましょうか。」

「え？止めないんじゃないの？」

ヘラとルートヴィッヒが歌いだしたことで何をそんなに危険視してるの？

疑問に思ったのでエリザベータさんに聞いてみることにした。

「イレーネちゃん、ルート君、ちょっと歌い出したら危ないの。」

「え？」

そつえばさっきまで居たマカロニ兄弟が居ない？

「ルート君はね、歌いだしてさらに飲んだら…Sが出てくるの。」

「え、Sなの？」

「まあヘラちゃんにそんな酷いことはしないとっけど…一応ね。」

ああ、だからルートヴィッヒも自分でそれを警戒してあんまり飲まないんだ。

「ただ、今日は私達が来たから…」

「ちょっと羽目はずしちゃったんだ。」

「そうなんだ…じゃ、私も手伝おうかな。」

「危ないわよ？男に任せておいた方が…」

「任せてください。」

「そういうと同時に、ガッシャン！とものすごい音。」

振り向くと、ルートヴィヒとヘラが協力して男子組みを退治（？）している所だった。

「うっわー」

「ローデリヒさん…あんな危ないことして。仕方ない、イレーネちゃん、協力してくれる？」

「え？いいよ」

さっきまで危ないって私の事を止めてたのに…どういつ心境の変化だろうか。

「ちょっとまってね」

「そう言われたので、少しの間ルートヴィヒとヘラを見ていた。」

「相変わらず男性陣が挑んではいるが、酔っ払いの勢いなのか、二」

人は止められていない。

「お待たせ。ほんと危ないから実力行使で行くね。」

帰ってきたエリザベータさんの手には、例のフライパン。

「本当はギル専用なんだけど…仕方ないから。ヘラちゃんを止めてあげてくれる？」

そう言ったエリザベータさんと、私は二人が暴れている方向に向かっていった。

「お、おい危ないぞエリザ！」

ギルが止めているが、それも無視。

「ルート君、ごめんね」

「葵、先輩命令。」

私達が言葉を発したのはほぼ同時。

エリザベータさんは、次の瞬間フライパンを振り上げて、

ルートヴィツヒに向けて振り落とし、カーン！という音を響かせた。

葵は私の「先輩命令」で取りあえず止まった。

そのまま足払いを掛けて、倒れてきた所を私がキャッチ。

「「「「「おおー」「」「」」」」

男性陣五人の声が重なった。

とりあえず、二人はそのまま早々に寝かせました。

このパーティーは意外と命がけかもしない。

きゅわ。 (後書き)

酔っ払ったルートって本当にこわそうです (笑)

Sになっても本当は大丈夫です。

ルートとヘラはそっくりな酔い方をする設定なのでw

じゅじゅわ。(前書き)

十話目突入です！

じゅっわ。

ヘラ、イレーネ達がパーティーの真っ最中。

暗い闇の中、話す人影。

「イヴァン、こっちは済んだよ」

「ありがとう」

話しているのは二人だが、周りには多くの倒れている人が居た。

その服は、どれも同じで、多くの銃が転がっていた。

「……くそっ！」

そのうちの一つが突然起き上がる。そして、

パンッ

銃声が響いた。

「駄目だよ、イヴァンを僕は倒させないから」

「僕もやられるつもりは無いからね」

「大人しく、寝てよ」

銃声は、倒れていた一人が持っている銃からではなく。

二人の、背の低い少年の持っている銃から聞こえた。

「……僕はイヴァンさんの騎士だよ。君達には倒せない」

「ま、まさか、お前は、『フォーレン・エンジェル堕天使の騎士』!?」

「あー、援軍来ちゃったね、どうする、『堕天使の騎士』君？」

「イヴァン、ふざけないでよ。取りあえず、逃げよう？」

倒れている人々の援軍に見つかった二人は、そのまま闇に消えた。

「ま、待て　!」

「やめろ、勝ち目はないッ!」

「くっ、ボスに報告だ!!」

「んー、う?あ、頭が痛い……!!」

「へー、起きたか」

かなりの頭の痛みに、意識はすぐに覚醒した。

でも、ルードどこ?

「ルード、どこだよ?」

何故か隣に居て、苦い顔をしているルートに聞く。

「この部屋はまあ、なんだその、説教部屋だ」

「へ？」

「すまん、へラ、昨日のことを覚えているか？」

「え？昨日？……あー」

昨日の暴走を思い出した。何かすみません。

それにしても結果的に女子陣二人でうちら二人を止めたよね。

すごくね？

「俺がビールをかけたのが原因だ、すまない、謝る」

「あーうちもちゃんと言ってなかったから。うち、ノンアルコールビールとか、こどもビールとかでも酔うんだよ、なんでか解んないけど」

「……そうなのか」

会話を続けていると、二人分の足音が響いた。

その足音は部屋の前で止まり、そして扉が開いた。

「元気か？ヴェスト？」

「起きたね、ヘラ。」

扉から出てきたのは、ギルと彩花先輩。

二人共にこやかな良い笑顔だ。

良い……笑顔ですね（現実逃避）

ルートはギルに、うちは彩花先輩に。

それぞれ思いっきり怒られました（あまりにも怖すぎて現実逃避2）

「兄ちゃん、」

「聞いた。ジラーニイのボスと付き人自らか……」

「これは喧嘩売られちゃったってことでもいいのかな？」

「多分な。だけど、慎重に行動しないと」

ジラーニイには油断は出来ない。絶対に。

油断はすぐに命取りになる。

それがジラーニイ。それがイヴァン＝ブラギンスキ。

「そろそろこっちからも動かないとね」

「そうだな」

兄ちゃんはそのまま黙り込んだ。

どう動くかが勝負だ。

俺はこれ以上仲間を殺されたくないんだ。

じゅっわ。(後書き)

これから他の組織をどんどん出していきます。

キャラが多すぎて上手く動かせないかもしれないです(汗
だけどがんばります！

じゅじゅいちわ。(前書き)

遮那が出てきましたー!!

じゅっいちわ。

「へー、居るか？」

怒られた後、部屋の中でぐるぐるしていたうちにかげられた声は、ルート之物。

「居るよー」

「今から少し出かけるのだが、いいか？」

「ん、分かった。ちょっと待ってて」

外に出られるような格好に着替え。

「行けるよ」

「行く場所は街中だからな、私服か？」

「……ごめん、もうちょっと待って」

仕事だと思ってたので制服（？）に着替えちゃったよ。

その後、うち等は街に出た。

そしたら。

「あいつは……バツシュか？」

「そうみたいだね。誰かを追いかけてるみたいだけど」

よく見ると追いかけてられているのは菊さん？

なんで追いかけてるんだろう。

「あの髪の色。遮那の一員か？」

「え？」

「説明してなかったか？三つあるうちの一つ、」

「いや、ごめん。思い出した。説明してたよ。でも」

「でも？」

「菊さんもマフィアなんだ……」

「誰だ？」

「ヘタリアの世界で、日本さんって言ってるうち等の祖国」

そう言った所で、セダーンツ！と独特の銃声が響いた。

そしてその銃弾は、菊さんの肩近くに当たったようだった。

「助ける？ルート」

祖国とは言え、ここはマフィアとして行動しなくちゃならない。

「助けよう。菊、と言ったか。あいつが本当に遮那なら、」

「じゃ、話は後でっ！」

菊さんとバツシュはビルとビルとの間に入っていった。

あの、バツシュさん。民衆さんが怖がってるんですけど。

あなた方って警察じゃ？

「まあ先に菊さんだね。んじゃルートお願いっ！」

「しくじるなよ、ヘラー！」

続いてうち等もビルの間へ。

うちは先回りして菊さんの前へと。

ルートは菊さんとバツシュの間へと。

しばらくっで。

「バツシュ、何をしているんだ？」

「この声……貴様、ルートヴィツヒか！」

うっすらとそんな声が聞こえた。

よし、後は。

「本田菊さんですね？」

「あなたは？……っ」

「話は後で。まずはバツシュから逃げないと、」

「素性の分からない人を信じるわけには行きませんから」

小さな、カチリ、と言う音が響いた。

「何か私がついていってもいい、と言えるようなものは無いのですか？」

まあ、そうなるとは思ってたけど。でもなー。

「えーと、ヘラ＝ヴァグナー。R・R幹部ルートヴィッヒ・バイルシュミットの付き人みたいなものです。これが一応証拠なんですけど」

「これは。どうやら本物のようですが、逆効果だと思えますよ」

「ですよー」

R・Rのバッジを見せたけど、まあ、そうだった。

銃を下ろしてはくれない。

「貴方は訳ありのようですね」

やっぱりばれちゃいますか。流石祖国。

伊達に長生きしてませんね。

こっちの世界ではどうなのか分からないけど。

「まあバッジも見せてもらったことですし、助けてもらいましょう」

日の丸の国旗に恥じない微笑をみせ、銃を下げた菊さん。

「じゃあ、こっちです」

うちと菊さんはルートと決めた場所に向け、走り出した。

じゅっいちわ。(後書き)

次は誰が出てきますかね(え

じゅじつわ。(前書き)

この世界の菊は30歳の設定です。

じゅじゅわ。

「まだかな、ルート」

「ルートさん、と言う方……遅いですね」

相手がバツシュということもあるのか、ルートはなかなか来ない。うち等がここに来てからもう20分近く経つのに。

菊さんが追いかけていたのは、今何をした、ということではなく、

単にマフィアの幹部、ということらしい。

バツシュさんとは昔からの腐れ縁というかなんとというか、まあそんな関係らしい。

「あ、あの方ではないですか？」

菊が見た方向には、確かにルートがこっちに向かって走ってくる姿。

「合ってます！ルート、こっちだよー！」

「へら、無事か」

「うん、大丈夫。菊さんも怪我はしてるけど一応無事。」

「分かった。　遮那幹部本田菊さんだな？」

「ええ」

「R・R幹部ルートヴィツヒ＝バイルシュミットだ」

そう言ったルートは、例のバッジを見せた。

「すまないが、遮那まで案内してもらっていいか？」

「え」

「さっき言ったろう。本当に遮那なら」と

「えと」

「お前はとつとと先に『話は後で』とか言って先に言ってしまったがな」

「すみません」

苦笑いしながらルートがそう言った。

うちはよく覚えてない。ごめんけど。

「失礼ながらルートさんとヘラさんは恋人同士なのですか？」

「「え」「」

突然菊さんの衝撃発言にうちとルートは同時に振り向いた。

「んな訳無いですよっ！」

「何を突然っ、」

そのまま、二人で必死に否定する。

まあ、確かにルートはヘタキャラで一番好きだけどさ、

……かつこいいけどさ。

ルートには、もっと大人の

「おい、ヘラ？」

「すみません、からかい過ぎてしまいましたか？」

考えていると、二人が声を掛けてきた。

ああ、いきなり黙ったからかな？

「いや、うちは大丈夫、です」

「本当か？ ならいいんだが」

「ルートさん、貴方……」

少し呆れたような声をだす菊さん。

何を考えていたのか分かったっちゃった、のかな。

「？ なんだ？」

「何でもありません。さあ、ヘラさん、こちらです」

「へ？ うおわっ」

手首をつかまれ連れて行かれる。

ルートまでとは行かないまでも、菊さんは意外と力が強かった。

「お、おいっ？」

ルートを置いて早足で歩く菊さんに、引っ張られてるうち。

ルートは慌てて後を走ってきた。

「おや、来られるのですか？」

「当たり前だ、ヘラを一人には出来ないのにな」

「何故です？」

「何故って……未成年だし、入ったばかりと言つのもあるし、ヘラには色々と事情があるからな」

「ああ、そうですね」

また菊さんは早歩きを始めた。

うちの腕をつかんだままで。

「菊、さん？」

呼びかけると、菊さんにはにっこりと微笑んで

「ちょっとした爺のお節介ですから」

と、小さい声で言った。

「はあ……」

良く分からないけど、放してくれそうもないし、このままでいいか。

それにしても菊さん「爺」って、この世界で貴方何歳なんですか？

じゅじにわ。(後書き)

普通30が爺って言わないけど、癖ですから。
いろいろ秘密があるんです。多分。

じゅじゅんわ。(前書き)

遮那グループと接触です。

しかしメンバーは二人しかでてこない。

じゅしゅんわ。

「こちらです」

菊さんに連れられてきた場所は、小さなアニメイト的な場所だった。

「菊、どういうことだ？」

「ふふ、騙されたと思って中に入ってください」

「（まさかこの世界でアニメイトが拝めるとは……）」

菊が扉を開ける。そこには、元の世界でよく見たアニメキャラたちが並んでいた。

それに店自体もアニメイトそのものだ。

「（ヘタリアはどこを探しても無い）」

少なくともこの世界は日本のイメージではない。

なのに、何故こんなに元の世界の物が再現されているのだろうか。

不思議に思ったが、菊さんに呼ばれ、奥へと向かうことにした。

「電 文庫の新刊とス ーカー文庫の新刊を合わせて20冊くれま
すか？」

「はい、ではこちらに」

すると、扉がゆっくりと開いた。

「いきますよ、お二人供」

「は？」

「ここが、遮那本部入り口です」

菊さんはこつちを振り返ると、そう、告げた。

扉の向こうには、闇が広がっている。

「……行くぞ、ヘラ」

「分かった」

問いに頷く。そして、改めて菊さんについて行く。

「耀さん、いらっしやいますか？」

「アニキは今出かけてるぜ」

「そうですか、今どちらに？」

「知らないんだぜ。それより菊、そいつら誰なんだぜ？」

「ああ、私の恩人です。バツシュさんに追われていたところを助けていただきました」

「やっぱり菊はドジなんだぜ」

「ええ、そうですね」

菊さんが呼びかけた先に居たのは勇洙だった。

予想通りの菊さんに対する敵対心、というのかなんなのか。

菊さんに喧嘩を売っているが、菊さんはそれを受け流していた。

大人の余裕というやつか。

「あー、ちよつといいか？」

「なんだぜ」

「お前と菊は仲間のなのでは……」

「兄貴が居るからここに居るだけで別に菊は仲間じゃないんだぜ」

「……そうか」

まあ最初はそついう反応だよね。

うちもそつだったし。

「それにしても困りましたね、耀さんが居ないとなると」

「ああ、ボスが居ないのか」

「すみませんが、また都合のいいときでよろしいでしょうか？」

「俺の電話番号を渡しておくから、電話をしてくれないか？」

「いいんですか？ 私がそれを他に売る可能性もありますが」

「俺のプライベート用の電話番号だ。それを売っても俺達には関係が無い。危険が及ぶのは俺だけだ。それに、俺の電話番号を売ったのならば、俺がここへ今日来た目的は無くなる」

「……そうですか。わかりました。では、またご連絡します」

菊さんに見送られ、うちとルートは外へ出た。

「結局、今日『遮那』に行った目的はなんなの？」

「ん？ああ、フェリシアーノに『遮那』と同盟を結びたい、と言われてな」

「できるといいね、同盟」

「そうだな。菊はいい奴だ。実を言うと、信じたいから、俺の電話番号を渡した」

「大丈夫だよ、きっと」

「信じよう。へー、何か食べて帰るか？」

「まじでっ！？ じゃあ行こう！」

ルートの手を取って走り出す。

遮那との同盟を結ぶかどうか、まだわからないけど。

きっといい結果になると、それを信じて。

じゅじゅんわ。(後書き)

アニメイト、とか現実の世界のものが出るのは仕様です。
後々物語に深く関係する……はずです。

じゅしゅんわ。(前書き)

遮那のターン!!

じゅじゅんわ。

「耀さん、お帰りですか」

「ああ、菊帰ってたあるか」

「はい。耀さん、面白い話があるのです。聞きませんか？」

「……今日何かあったあるか？」

少し呆れたような顔をして、王耀　私達「遮那」のボスは話しかけてきた。

無理も無いだろう。顔がにやけているのが自分でも分かるほどだから。

「『R・R』から、使いが来ました」

そう、告げて。私は表情を引き締める。

「とうとう来たあるか。菊はどう思っているある？」

「本田菊、としてだけでなく。遮那幹部としても申し上げます」

「『R・R』と同盟を結ぶべきだと」

「……いつも二次元でしか意見を言わない菊が言うなら本物あるね」

「失礼な。二次元以外でも言う時はありますよ」

苦笑いをして、引き締めた表情に戻す。

「個人的な感情も大きいんですけど。遮那幹部と知って取引を持ちかけてくるとは、なかなか度胸のある方ですよ」

「よりによって菊にあるか」

「ええ。これです」

一枚の紙を取り出す。それは、今日貰った、『ルートヴィヒ』の電話番号が書かれた物。

「電話番号？　それがどうしたある」

「今日あつたばかりの、しかも敵かもしれない私に渡すものですか。少し残念に思っていたのですが。予想以上を言ってくれました。」

二人の顔を思い出し、その言葉を告げる。

「これは俺の電話番号だから、売ったとしても俺達はダメージを負わない。そして、今日俺達は来た意味は無くなる、と」

「同盟を結ぶ価値は無い、ということあるな」

「そして、それが広まれば、私達には『同盟を結ばれなかった、価値がないマフィア』という汚名が付いてしまうでしょう」

「そうあるね。まあそのくらい我にとっては大丈夫あるけれど」

耀さんにはにつこりと笑みを浮かべた。

「だけど若いのにそれだけ考えられたら十分ある。同盟を結ぶ価値はありそうあるな」

「では、同盟を結ぶ、と言う事で？」

「いいあるよ。明日でもいいある」

「ありがとうございます。では私のほうから連絡しておきますので」

「わかったある」

「それでは失礼します」

扉を開け、部屋から出る。そして、携帯を取り出す。

もちろん、携帯はプライベート用の物だ。

「……ルートヴィツヒさんですか？本田菊です。私達のボスは明日にでも会ってみたい、と言われているのですが。……ええ、では明日、昼過ぎに。それでは失礼します」

通話を終わらせ、携帯を閉じる。

「明日が楽しみですね」

薄く微笑んで、自分の部屋に戻る。

「私達をこんなにドキドキさせる方はそういませんから」

月が綺麗な、この夜が。いい事のある、暗示でありますよつた。

じゅじゆんわ。(後書き)

キャラがぜんぜん出てこない……だと……

じゆんじわ。(前書き)

同盟組、ルート&ヘラ視点です。

じゅーじゅわ。

「おいしいか？」

「めっちゃ美味しい！」

「……年頃の女が美味しい、とか言うもんじゃないと思うぞ」

「まあそれがうちだから」

うちとルートが行ったお店は、ラーメン屋。

帰り道、いい匂いがしたので寄ってみたのだ。

「（そういえば、ここ遮那に近いから……ラーメン屋とかあるのかも）」

少なくとも、R・Rの近くにはラーメン屋なんて一軒しかないはずだ。

だけど、遮那を出てからすぐにあったここを含め、よく周りを見渡す。

結構ラーメン屋があったのだ。中華料理店とか、寿司屋とかも。

違和感を感じる。

ここには、ヘタリアのキャラ達が国だという概念はないはずだ。

それなのに、綺麗に分かれすぎているのだ。

「へラ？ どうした？ 食べられないのか」

「ううえ？ あー、いや大丈夫。考え事してただけ」

ルートに声をかけられ、はっ、と気付く。

まだラーメンは残っているのに考え事をしていたので、ルートは心配してくれたようだ。

「そうか。冷めないうちに食べたほうがうまいと思うぞ」

「うん」

頷いて、続きを食べ始める。

だけど、さっき考えたことはまだ頭に残っている。

「日本」である菊、「中国」である耀。所属している組織、「遮那」の近くには日本・中国料理店をはじめとしたアジアっぽい店が並んでいる。

うち達が最初に飛ばされてきた、「ドイツ」であるルート、「イタリア」であるフェリ、ロヴィが居る組織「R・R」の近くには、ヨーロッパらしい店が並ぶ。

しかし、同じヨーロッパであるはずの「フランス」らしい店はない。

それに呼応するかのように、「R・R」には「フランス」である
フランスは居ない。

いかにも、うち達の記憶に合わせたと言う様に。

「（なにか、帰れる秘密があるのかも知れない）」

そこに、うち達の世界へと繋がる秘密があって、うち達は帰れる
かもしれない。

その時には、この世界はなくなるだろう。

「（彩花先輩に報告した方がいいよね）」

ラーメンを食べ終わり、箸を置く。

「ごちそうさま」

「美味かった。また機会があれば来る」

二人で席を立ち、ルートはお金を置いた。

「今度は母親も連れてきて食ってくれやー」

店を出る際、ラーメン屋の主人が大声で声をかけてきた。

もしかして、うちルートの子供だと思われてる!?

「どーせうち小さいし……」

「あー……へラ？ 気を落とすな」

「あーい」

そういいながらも結構気にしていることなので、肩を落とす。

そうして、何分か歩いていると。

突然、ピリリリ、とルートの携帯の着信音が鳴った。

「……誰だ？」

登録している番号からの電話ではない。

小さく呟いたルートの言葉から分かった。

ぴ、と通話を開始させ、うちとルートは立ち止まる。

「その声、菊、か」

呟かれた声に少し緊張感を出す。

その電話は、菊さんから？

「ルート、」

こくり、と頷いている

菊さん、だ。

「……分かった。明日の昼過ぎ、だな。　ああ、では失礼する」

ぷつ、と電話を切った。そして、振り向いて。

「明日、昼過ぎ。『遮那』へもう一度行くぞ」

そうルートは告げた。

じゅじろくわ。(前書き)

ロシア語表記が少し時間かかるので、
ジラーニイはカタカナ表示でいきます。
と言うわけでジラーニイ所属主要キャラは
今回少なくとも名前で全員出てきます。

じゅじゅくわ。

「最近イヴァンさんアイザックさんと一緒にいるね」

「イヴァンの事なんて今どうでもいいしーアイザックもピンクにするしー」

「アイザックさん人だし男だよ!？」

「別にいいしー気に入った物は全部ピンクにするし！」

「(ピンクにするっていうのそういう基準なんだ……)」

呆れながらも、アイザックさんをフェリクスが気に入っていることに安心する。

アイザックさんは皆と仲良くなれるか心配していたようだから。

「アイザックさんが探している人、見つければいいんだけどなあ」

「アイザックの友達ならきっとピンクにできるしー」

人見知りのフェリクスが、その人個人だけでなく、会った事もないその人の友達の事まで気に入る、というのはとても珍しいことだ。

「とにかく、今日皆でナターリアちゃんとアリアさんのお見舞いに行くから」

「しょうがないし。誰が行く？」

「えっと、イヴァンさんとアイザックさん、それからエドアルド、ライヴィスかな？」

「いつものメンバーだし」

「あはは、そうだね」

笑いながら、皆で待ち合わせている場所へ歩く。

多分、周りから見れば唯の友達同士の、ほほえましい光景なのだろうけど。

僕の背中に担がれているゴルフバッグには、剣がある。

フェリクスのかばんにはナイフが。

どちらも、さっき起こった抗争で血塗れている。

元は、唯の学校のサークルで知り合って、社会人となったただけの僕ら。

だけど、今僕らはこうして、マフィアとして仕事をしている。

イヴァンさんを責めるつもりはない。分かかって僕らについてきたのだから。

だけど、全てが解決したときは、また、唯の人として笑いあって暮らしたい。

「トリス？ どうしたんだし」

「え？ あ、あなんでもないよ。行こう、フェリクス」
にっこりと、微笑みかける。

少し心配そうだったが、安心したのかまた歩き始める。

僕らが、いつか戻れる日は、来るのだろうか

「ねえ、アイザック君探し人は見つかった？」

「いや、この近くには居ないみたい」

「もしかしたら、『遮那』とか『R・R』に居るかもしれないけど」

「そしたらどうしようかなあ」

僕はそう言って、少し笑った。

もし、僕の探し人が他の組織にいるのならば。

僕は、その時どうするのだろうか。

……いや、きっと。

「んーでも、イヴァンについていくかな。できるだけ説得してみる」

「できるかな？ なんせ僕は悪役だからね」

「そうかもね。だけど皆とはあまり戦いたくないから」

それは、本音だ。だけど、僕は皆にはついていけないだろう。

こっちが「悪役」で、あっちが「正義」と知っていても。

だって、今僕は。

「んじゃ、信頼してるよ。僕の騎士」

イヴァンさんの、騎士だから。

じゅじろくわ。(後書き)

というわけで、ジラーニイは
旧ソビエト連邦面子です。

ジラーニイがいろいろ物語の鍵を握ります。

じゅしななわ。(前書き)

S e c r e t P o l i c e の メ ン バ ー が 出 て こ っ た …… o r z

じゅっななわ。

ふと、目を覚ました。

明日の遮那との話し合いに備えて早く寝ていたが、どっちら早すぎたらしい。

「今何時……うっわ、四時だ」

あまり早く起きるほうではないので、驚く。

学校があれば別だが、ここには学校は無い、起きるのは九時ごろだ。

起きたとはいえ、さすがに眠いのもう一眠りしようと布団の中に潜り込む。

「（眠い……それにしても、京次はどこに居るんだろ）」

京次らしき人が死んだ、と言うのは聞いた事が無いから、大丈夫なのだろうけど。

「（遮那に、もしかしたら……居るかも……しれない……なあ）」

ゆっくりと、瞼が落ちてくる。

そしてうちは、もう一度眠りへと落ちていった。

「へー、準備は出来たか？」

「ごめ、ちよっと待って〜！」

実質うちは二度寝をしてしまったような物だ。

案の定、九時には起きるつもりが、もう11時になりそうだ。

つまり、寝坊をしてしまったわけだ。

「……よし、できた！」

いくら急いでいる、と言っても今日は遮那のボスに会うのだ、

身だしなみはちゃんと整える。

「ごめん、ルート！」

拳銃、ルガーP38を引つつかみ、外へと駆け出す。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫！」

「よし、行くか」

まだ11時過ぎではあるのだが、昼飯を食べて行くつ、と言っ事になったので出発する。

「おおお緊張する」

「俺が話すんだが……俺より緊張してどうする」

困ったような顔をして微笑むルート。

「いや、でも初めてだし。ってかこないだこっちの世界自体に入っただばっかりなのに」

一緒に行くのがうちでいいの？

告げようとした言葉は、止まってしまった。

「へらまさかお前俺に遠慮してるのか？」

「え？」

「しょうがないとはいえ、お前達を無理矢理こっちの世界に引き込んでしまったしな」

少し照れたように前を向き、歩くルート。

「俺は、フェリシアーノにお前と共にいて、守るように言われている」

「そうなの？」

「ああ。それに、俺自身お前を買っている。それでは不満か？」

「不満なんかない、よ」

もし、それがうちを心配させないようついた嘘だとしても。

会ったばかりの人、しかもアニメキャラでも、憧れていた人にそう言われるのは嬉しい。

「ありがとう、ルート」

「とにかく、あまり気にするな。さあ、行くぞ」

やはり照れているのだろう、ルートはこっちを見ない。

だけど、それが可笑しくて。

「ルートお？顔が真っ赤ですよ」

「からかうんじゃないっ！！」

少しルートの事をからかってみる。

案の定叱られてしまったけど、まああんまり気にしない。

からかったのは、自分の照れ隠しのためでもあるから。

「ごめんごめん……よし、行こう、ルート！」

さあ、短い間でもいい。君とうちとで、共に歩もう。

じゅうななわ。(後書き)

最後がこれまでで一番がっかりな感じになりました。

悪魔でも「一番」であって、「最初」ではないのであしからず。

がっかりなのはいつもの事ですから……

じゅじはちわ。(前書き)

ルート&ヘラで遮那へと向かっている途中です。

じゅっはちわ。

「そこのお方」

「え？」

昼を食べ終わり、遮那への道を歩いていたとき。

少し胡散臭い男の人に話しかけられた。

「重本葵さんですか？」

「！？」

「へー、ここで名前は言っていないよな？」

「……言っていないよ」

「話は重本さんにだけあるのです。隣のドイツさんは少し離れていて頂けませんかねえ」

「ドイツ……？」

「『ヘタリア』の世界でのルートの名前だよ」

うちの名前だけでなく、ルートの『ヘタリア』での名前も知っている。

この人は、一体誰？

「とにかく、お前を信用できないからな、こいつから離れるわけにはいかん」

「しょうがありませんね」

男は、困った顔をして、溜息を吐いた。そして、

「では、しばらく眠っていてください」

一瞬でルートの後ろに回ったかと思うと、男はルートの背に手を当てる。

「ルートっ…」

「な……」

とん、と男が手で背を押した。

瞬間、ルートは側にあつた壁へと叩きつけられた。

「か、は……っ」

「ルートおおおっ！！」

「彼ぐらいの人になるとこのくらいやらなければなりませんね」

「あんだ、ルートに何したの!？」

「おやおや、すみません。唯私に逆らうのは、彼を殺したくないの

なら良策ではありませんね」

そう言うと、男は手のひらの上に炎を出した。

いつでもルートを殺せると言う事だろう。

「……………話ってなに」

「重本さん、この世界から出たいのならば、何事も本気でやるべきですよ」

「は？」

「かつての友が敵となっても、戦いなさい」

「なんで」

「それが、ここから出る道ですよ。逆に、R・Rを抜けたり、友との戦いを自ら避ければ、いつまでたっても帰れないでしょう」

にっこりと笑い、男は言った。

「分かりましたね。では、ドイツさんも目を覚まさせますから。どうぞ遮那へ行ってください」

「な、ちょっと待って、あんたってなんなの!？」

「私は……………いえ、まだ早いです。では」

男は次の瞬間姿を消した。

「ん……、」

「ルート、大丈夫!？」

「あ、あなんとかな」

「良かった……」

ほっ、と息を吐く。かなり安心した。

「へー、何を言われたんだ？」

「え？」

「顔が強張っているぞ。なあ、何を言われたんだ？」

「それは、は」

教えて、いいのかな。

ルートは優しいから。皆、優しいから。

もしそ…うな…った時、皆はうちと「友」との戦いを無理にでも止めるのではないか。

自分が選んだ事だから、うちが避ける訳じゃない、と言って。

でも、そうしたら皆になにかあるかもしれない。

そんな事になったら、うちは自分を許せない。

「なんでもないよ、ごめん、ルート」

無理矢理に笑顔を作る。上手く、出来ているかな……？

「へラ……」

「聞かないで。お願いだから」

「……分かった。だが、いつかお前から聞かせてくれ」

「できたらね」

少し気まずい空気の中、うちとルートは遮那への道を歩いた。

じゅっはちわ。(後書き)

謎の男登場です。

後々ストーリーに深くかかわってきます……
ただと登場は少ないと思います。

じゅじゅきゅわ。(前書き)

ギル&イレーネのターン！
遮那チームはお休みです。

じゅっきゅつわ。

「『フォーレン・エンジェル
墮天使の騎士』う？」

「最近現れたイヴァンの野郎の部下だそうだ。かなり強いらしいな……」

「それを私に話したってことは……その人何かあるってことなの？」

「そうだ。ヘラが今遮那に行っているからな。イレエネ、お前にだけ話しておく」

ギルベルトの真剣な顔、これは悪い事を予想していたほうがいい。

それも、葵が聞いたら暴走してしまう可能性のある事。

だけれど、私達の誰かには伝えないといけない事。

だから、葵より年上の私に言う、ってことかな。

「そいつは、ジラーニイに居るにはあまりに背が低い、そして黒髪。丁度、遮那に居るような人物なんだ」

遮那、アジア系のヘタリアキャラが所属してるんだっけ。

そうすると、確かにそうかもしれない。

「遮那にいるような姿で、他の組織に居る。そんな奴は誰だ？」

「私達」

「正解。まあ他にも居るには居るが、現れ始めた時期も丁度お前等が来た日より少し遅いぐらいだ。最低限度の銃の扱いを教えてもらったとすれば、丁度日にちは重なる」

なるほど、だから京次だと。

可能性は十分にある。

だって、ここに居ない。H O Jにも居ない。遮那は　この間葵が行っている。

「確かに、葵……ヘラの事ね。話したら暴走する、かもなあ」

葵にとって京次はパートナーみたいなものだ。

それが、敵となるのなら。ショックを受けるのは目に見えている。

特に、あの子は感情表現激しいところあるからね……

「写真か何かあれば、多分確信に変わるんだろうがな」

「京次が写っていたら間違える事はないと思う」

ちくしょー、とギルベルトは悪態をつきながら頭を掻く。

「とにかく、まだ確信はねえから、ヘラにも話さないでくれ」

「……分かった」

いつか話さないといけないとは思っ。

だけど、今話すべきではないと思っ。

もしそれが京次なら、できれば私が葵より先に会うことが出来ればいいと思っ。

「ギルベルト、」

「どうした？」

「ジラーニイと会う機会は、ある？」

「……自分で確かめるつもりか？」

ギルベルトは、少し目を細めている。

「なあ、ジラーニイと接触しても『墮天使の騎士』は出てこないかもしれないんだぜ。あいつはイヴァンと共に行動してるらしいしな」

「それでも、会えるまで何度でもジラーニイに接触する」

出てこなかったなら、相手に『墮天使の騎士が探されている』事を伝えるに帰ってもらう。

あくまでも、自然に。

私なら出来る、と思っ。心裏戦は得意だしね。

「わーったよ、ジラーニイとの抗争があつたらそこにお前を連れて行く。どうせ駄目だつても聞かねーんだろ？ その代わり、俺も一緒に行くからな」

「分かった。じゃあ、お願い」

ギルベルト 国、プロイセンの化身。戦う為に生まれた国。

心裏戦には長けているはず。

自分で言うのもなんだけど、私はそういう心裏戦は得意だと思う。

結構、良いコンビになるのかも知れない

じゅしきむじむ。(後書き)

キャラ説明のときはぼろぼろしてるとかよくな気が……w
すみません

ふんふん十詰しゅー

（お書留） さしゅんご

にじゅうわ。

遮那との同盟はあっさり成り立った。

「菊と我にあれだけ取引を上手く持ちかけたあるからな、有望株ある」

遮那のボス、王さんはそう言って、同盟を快く引き受けた。

……やっぱりこっちでも二人は年が良くわからない。

「……へラ」

「ん、何？」

帰り道。昼の事でやはり気まずい空気が流れる中、ルートは言った。

「聞くな、と言ったから何があったかは聞かないが、これだけは覚えておいてくれないか」

「……うん」

「溜め込むなよ。もし俺達に話せばまずい事でもお前にはイレーネとヴィタリも居るんだからな」

「そう、だね」

「それに、俺達はお前が決めた事なら邪魔はしない。お前の意思な

ら、なおさら」

そう言ったルートの顔には、少し赤が灯っていた。

「ぶっ」

照れているのだろう。それがルートらしくて、私は吹き出した。

案の定、ルートは顔をさらに赤くして怒鳴った。

「な、何を笑っている!？」

「怒らない怒らない! ルート」

できるだけ、茶化したような声で。

「約束して。うちが決めた事はそれが自分達の邪魔になつたりしないかぎり、止めないで」

まあ、どれだけ茶化したところで、内容が内容なだけに、深刻なムードにはなってしまうが。

「最初からそう言っている。……だが危険な事は俺達に言ってくれ。それくらいならいいだろう?」

「うん、お願いするわ」

まだ、雰囲気少し暗いけど。まあ喧嘩にはならなくてよかったか。

「んじゃ帰ろー。皆まってるだろうし」

「そうだな。……ん？」

「何？」

「兄貴から電話だ。少し待っていてくれるか」

「分かった」

ルートが少し離れた所でギルと話し始めてしまったので、辺りを見渡す。

この道はあまり人通りがないようで、さっきを一人見たくらいだ。

「ん？」

そんな事を考えていると、建物の影に人影が見えた。

子供のような背なのにスーツを着ているのと後ろ姿が京次に似ているのが気になって、じ、と見ていると。

「っ！！」

何かを取り出しながら、彼は振り向いた。そして、うちを見て驚いたような顔になり、走り出した。

その顔は、正真正銘京次のもので。

「京次っ！！！」

「ヘラ！？」

ルートの声が聞こえるが、止まっていられない。

京次が走っていった方向へ向かって、走り出す。

「京次　！」

なんで逃げたの？今までどこに居たの？

どうして銃なんて持つてるの？

この答えが聞きたくて、ただ一心不乱に。

たどり着いた先は、廃工場

立ち止まった京次は、こつちを振り向いて言った。

「なんで葵　R・Rの服着てるの？」

「え？」

その問いはこつちの世界に足を踏み入れている人にしか解らない物。

服についているR・Rの紋章が解らなければそんな事は問えない。

そして、その表情は　とても冷たかった。

にじゅうわ。(後書き)

次は組織の詳しい紹介をあげます！。

その次は他の人たちのターンにしようか
そのまま続けるか迷っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7125v/>

マフィアな国、ですか？

2012年1月14日08時45分発行